

◆俯瞰メルマガ第 96 号◆

俯瞰工学研究所の松島克守のメールマガジンです。俯瞰メール 96 号をお送りします。pdf 版はホームページに掲載し、facebook の俯瞰工学研究所のページにおいてもノートに掲載いたしますので、ご利用ください。

◆時候のご挨拶

早いものでもう師走です。この一年、家族一同健康で何事もなく過ごせました。年末のいくつかの忘年会も終わり、後は正月を迎えるばかりです。例年通り年賀状も少し減ってきましたが、約 400 枚投函しました。30 年以上年賀状交換だけの方もたくさん居ますが、それぞれ健在を確認しています。令和にこだわりませんが、日本は今、次世代の日本に向かって大きく舵を切らないといけません。

●地政学から地経学へ

●年末までの決着

●渋谷スクランブルスクエアに行ってきました

●俯瞰サロン

●俯瞰のクッキング“健康食”

●サムライたちのイノベーション

●俯瞰の書棚 “日本 4.0 国家戦略の新しいリアル”

●雑感・私感

◆地政学から地経学へ◆

エドワード・ルトワックの「冷戦後の世界は、軍事を中心とした地政学の世界から、経済をフィールドとする地経学の世界に軸を移しつつある。この『地経学』（ジオエコノミックス）という概念は、『地政学』（ジオポリティックス）という概念を発展させたもの。地政学に経済の側面を加えたものが地経学である。つまり地経学とは、『貿易の文法』で展開される『紛争の論理』なのである。」

という視座で世界を俯瞰すると、現在の混沌とした国際情勢がわかりやすくなります。「貿易の文法」は、単に WTO 等の「貿易のルール」と読んでください。訳者の思い入れがあると思います。

この視点で見ると、現在の米中貿易戦争は、絵に描いたようなこの図式です。トランプ政権は、まさにこの戦略を推し進めているのでしょう。西太平洋と南シナ海の空間では、地政学的な勢力争いをしながら貿易戦争と言う経済面での戦争を推進しているわけです。まさに地経学的な米中戦争です。米中の対立の主戦場は、もはや軍事的な領域から、地経学的な領域、すなわち経済とテクノロジーをめぐる紛争に移りつつあるわけです。詳細は「俯瞰の書棚」の記事で。

プーチン大統領が現在推進している、軍事的な拡張と資源をテコにした外交活動は、まさにこの地経学戦略そのものです。特にヨーロッパに対する天然ガスパイプラインの増設は、地経学を戦略的

に展開しているということです。EU では過度にロシアにエネルギーに依存することは、地政学的にリスクが高いと議論されながらも、着実にロシアの地経学戦略に乗せられています。

ですからグローバル経済は、この地経学的な展開の“国境のない世界”が創り出したものです。グローバル経済の戦場として、国境を越えて弱肉強食のむき出しの資本主義が展開することによって、富める者とその他の深い分断を作り、敗者を作ります。先進国の労働者は、遙か遠い国の低賃金の労働者の攻勢を受けたわけです。一方、先進国の企業は、境界のない世界で収益を拡大させ急成長しました。ネット企業は、インターネットによる境界のない世界に超高速のプラットフォームをあっという間に展開して、巨大な企業にのし上がったわけです。

英国の EU 離脱も、改めて国境を復活して、境界のない世界からの分離と見ることも出来ます。EU に加盟した東欧諸国からの労働力の流入に、英国労働者は生活水準の切り下げを余儀なくさせられた面も、ブレグジット支持に繋がったのでしょうか。EU 内部のがたつきも、地政学的に境界のない EU の世界での地経学的な経済活動とのある種のジレンマでしょうか。リベラルという理想を説く中道勢力が支持を失い、右派と左派に流れて国民の分断が深まった典型が、ドイツ、フランス、イタリアです。

今、各国で議論されているデジタル課税、個人データ保護規制は、まさに境界のない世界に必要なルールを作る動きです。ここでは米国と EU がせめぎ合いです。ただ米国は、連邦政府と革新派のカルフォルニア州では差異があります。で、日本はどうする？です。

地経学的な観点から見ると、デジタル人民元の今後が気になります。デジタル人民元と一帯一路の展開は、単なるシルクロードでは済まされません。すでにギリシャとイタリアは、この中国の戦略的な展開に組み込まれつつあります。経済基盤が弱い東欧諸国も、これに組み込まれていく可能性が高いです。これによってドイツとフランス中心とした EU が、相対的に弱体化することも考えられます。すでに中国は、インドシナ半島、南太平洋さらに南米にも地経学的な勢力圏を拡大しています。アメリカが国内第一主義であることが、中国の地経学的な戦略の展開を許しています。アメリカの地経学的な勢力圏は、すなわち中国に侵食されているのです。日本はどうする？

OECD デジタル税制を巡る欧米の政治経済力学

<https://www.tkfd.or.jp/research/detail.php?id=3304>

米加州の個人情報保護法に備えよ(The Economist)

<https://www.nikkei.com/article/DGXMZO53690900T21C19A2TCR000/>

◆年末までの決着◆

年末までにどう決着するのか、やきもきしていた幾つかのことがありました。

まずお騒がせのイギリスのEU離脱ですが、ジョンソン首相の策が成功して保守党が過半数を取り、1月末のEU離脱はほぼ確実になりました。そして移行期間の延長は絶対しないという強気の発言で、EUに短期の交渉を迫っています。すでにEUはイギリスの離脱について納得していますか

ら、短期で交渉は妥結するのではないのでしょうか。EUにとっても合意なき離脱は、インパクトが大きいからです。

実現できれば、ジョンソン首相は歴史に名を残します。その後イギリス経済がどうなるか、興味があります。

米中貿易戦争も予想通り中締めで、一旦双方とも矛を収めました。まだ正式に発表されていないので内容は不明ですが、基本的に地経学的な構造は変わりませんから、このままグズグズとした状態が続くのは間違いありません。これは、たとえトランプ大統領が再選されなくても、あまり変わることは無いでしょう。民主党も、中国に対しては地経学的な強い対峙を求めていますから。

人工知能、5G、ロボットは、まさに地経学の戦場です。ここは、簡単に中国もアメリカも妥協することができません。今や食料や石油といった、かつての戦略的な資源の価値が相対的に落ちていきますから、この分野での妥協は難しくは無いでしょう。

一番のお騒がせは、米朝交渉です。北朝鮮の非核化は、中国とロシアが本気にならないと実現するはずはありません。しかし本気には見えません。制裁緩和の提案すら安保理にしていますし、抜け道も黙認しているようです。

シンガポールにおいて鳴物入りで始まった米朝交渉は、振り返って見れば、ほとんど元の状態になりつつあります。北朝鮮はこの時間を利用して、核弾頭搭載のICBMを完成させアメリカに経済制裁を緩和するように迫るといふ、むしろ攻勢に転じています。短距離ミサイルの発射を許して、米韓演習も抑えて我慢強く交渉しているのが、トランプ政権です。明らかに包括的な戦略に誤りがあると思います。

金正恩委員長との個人的な関係と握りを信じている、いかにもアメリカのビジネスマンのやり方ですが、相手はビジネスマンではありません。本来は外交の専門家、戦略家を集めた包括的な戦略を持って対峙すべき相手です。

非核化した北朝鮮が、アメリカの戦略的な保護の下で経済的に発展するというアメリカの提案に対して、前の俯瞰メールでも書きましたが、金正恩は完全な防衛能力を維持して独立を確立したスイス型の国家を目指しているのでは無いのでしょうか。現状維持です。韓国政権より遙かに戦略能力は高いと見ます。

英総選挙で圧勝したジョンソン首相 それでもブレグジットは前途多難

<https://www.newsweekjapan.jp/stories/world/2019/12/post-13660.php>

米中合意に見えるトランプの思惑、「不確実性の霧」の向こうには何がある？

<https://diamond.jp/articles/-/223792>

非核化へ米朝プロセス後押し RCEP早期署名目指す一日中韓首脳

<https://www.jiji.com/jc/article?k=20191224.00091&g=pol>

トランプ政権の対北政策は「失敗認めよ」 ボルトン氏が痛烈批判

<https://www.sankei.com/world/news/191224/wor191224.0007-n1.html>

金委員長の核プログラム、米国本土攻撃は可能か

<https://www.bloomberg.co.jp/news/articles/2019-12-25/Q31PDR6JIJUQ01>

◆渋谷スクランブルスクエアに行ってきました◆

渋谷のスクランブルスクエアに行ってきました。この名前は、ビル全体が完成すれば、スクランブル交差点に面するビルということに由来すると説明されました。今ある東横百貨店の建て替えが完成すれば、巨大な商業ビルが完成するわけです。しかし今は、入口がかなり分かりにくいです。渋谷東口のバスターミナルから入るのが分かりやすいと思いますが、地下の通路は工事中ということもあって、ほとんど迷路で、道を聞いても、やはり迷いました。

一番の売り物は屋上の展望台です。従来の展望台と違い開放的で、1つのテーマパークです。あいにく、その日はあまり天候が良くなかったのですが、富士山は見えませんでした。HP でみると素晴らしい眺望でした。一階下のホールも色々趣向があって楽しめます。

展望台行きのエレベーターは予約制ですから、週末でもあらかじめチケットを購入しておけば、待つことなく乗れます。縦に走る電車です。

いつもながら飲食のテナントが良いです。ストリームの飲食も良いです。もちろんいろんなショップも入っていますが、主力はオフィスビルです。今日現在、東京都内でテナント料が1番高いビルとも言われています。現在のスクランブルには mixi が入っています。約5千人。すぐ前に開業した東急プラザを建て替えた渋谷フクラスには GMO 約5千人が入っています。そしてストリームには Google 約5千人が入っています。渋谷駅周辺は IT 企業の集積が進んで、他の IT 企業を加えれば、渋谷駅周辺に2万人以上の IT エンジニアが居ることになります。この人たちが、この渋谷のハードウェアを「ソフトウェア」を使って新しい形態の街にしていこうでしょう。

大手町周辺はたくさんのビルが建てられていますが、ビルの中と外の街が分断されています。銀座が楽しいのはビルの中と外の街が一体化しているからです。渋谷の街はビルの中と外の街がかなり融合されています。この融合が進めば、私が勝手に主張している「渋谷というメディア」になります。デジタル企業の集積は、この私の希望を実現させてくれるでしょう。渋谷というブランドが世界的に広がることを確信しています。

SHIBUYA SKY

<https://www.shibuya-scramble-square.com/sky/>

<https://www.youtube.com/watch?v=4gEpmdU-W7Y>

◆俯瞰のクッキング“健康食”◆

よく人から、お元気ですね、肌がいいですね、と言われます。その時はいつも「多分食べているものが違うからじゃない？」と言います。相手はちょっと引きますね。

そして、いつも野菜のデザイナーフーズの話をしてします。このコラムでも何回かすでに紹介していますが。

1990年にアメリカの国立がん研究所が発表した、長年の疫学的な研究データに基づいた免疫力を高める野菜や果物をピラミッド状にまとめた図です。私はこれを参考にして20年以上自分の食生活を整えてきました。

ピラミッドは三層になっていて、1番効果が高い野菜として、まず頂上にニンニク、大豆、キャベツ、しょうが、人参、セロリ、などが挙げられています。

そして第二層にはタマネギ、ブロッコリー、お茶、カリフラワー、玄米、トマト、ナス、ピーマン、柑橘類と続きます。

私は毎朝野菜ジュースを作って飲んでます。人参とセロリとレモン汁です。これにオメガ6のアマニオイルを大さじ一杯入れます。野菜ジュースの缶詰とは違います。生きた野菜と死んだ野菜では、全く違います。

大豆は納豆として毎朝食べます。ネギと一緒にです。そしてミニトマトを食べます。朝食は、これに加えてチーズ一切れを食べます。

キャベツ、ピーマン、ブロッコリー、ナスは野菜料理として順番に作ります。

キャベツは、外側の青いところは回鍋肉にします。その内側は、蒸し煮です。一人前、8分の1くらいを楕円型切りにして使います。ニンニクと玉ねぎを炒めて、サイコロ状のベーコンを入れて炒め、その上にキャベツを載せます。その上から白ワインと言いたいのですが、料理酒をかけます。軽く塩胡椒で味付けした後弱火で20分ほど蒸し煮にします。キャベツの上にバターをひと切れ置いておくと、さらに美味しくなります。

ピーマンは、青椒肉糸にすることが多いです。夏野菜が出回る時はピーマン、ナス、ズッキーニ、トマトでよくラタトゥイユを作ります。

ニンニクと生姜、ネギは、基本的に毎日とるようにしています。ニンニクも1人一欠け以上使うようにしています。

ということで、野菜のデザイナーフーズは、私の料理のテンプレートです。

魚料理としては、前回ご紹介したサンマやイワシの、ハーブとパン粉とパルメザンチーズを混ぜ合

わせたものを載せてオーブンで焼いた料理はよく作ります。

また牡蛎の春巻きも時々作ります。春巻きの皮に水気を紙タオルでとった牡蛎2つほど入れて、パルメザンチーズのおろしたものを振って、細かく刻んだネギを入れます。場合によっては紫蘇の葉を入れます。そして春巻きのように包みます。そして包んだ春巻きにたっぷり油をまぶします。揚げる代わりにこれをオーブンで10分やきます。揚げ物にすると油を吸いますので、私はいつもこの手法を使っています。牡蛎の代わりに叩きエビでもおいしいです。

野菜料理、魚料理、肉料理を毎日作ってきましたが、ちょっと多いので、魚と肉料理は交互にしようかと考えています。具沢山の味噌汁は毎日作りますが、ワカメやアオサをよく入れて、海藻類を積極的にとるように努めています。特にアオサは最後に入れるだけですから。ちなみに私はローカーボン食で、基本的に御飯、麺、パン等はありません。

ガンを予防する野菜"デザイナーフーズ"って何？

https://www.huffingtonpost.jp/office-de-yasai-news/cancer_b_8552544.html

◆“サムライたちのイノベーション”◆

前回「俯瞰の書棚」で紹介した本の一部を紹介しましょう。立ち読み気分で読んでください。原稿は縦書です

第二章 スティーブ・ジョブズを救った日本人

・IBMを超える！嘉本の固い決意

「我々ソニーは、IBMを超える記録ディスクを作る」

新進気鋭のエンジニアであった嘉本秀年は、記録ディスクであるFD（フロッピーディスク）の初期案の発表に際して、居並ぶ上司と役員達の面前で宣言した。

そんな、世界中で業界標準を生み出しているIBMを超えるという大胆な発言に、批判の嵐が巻き起こった。

しかし、嘉本は本気だった。

「ソニーなら、絶対にできる。やってみせる」

周囲の冷ややかな反応をものともせず、嘉本は心にそう誓った。

（略）

こうして開発が始まったのがソニー3.5インチFDの事業だった。その企画構想はやはり注目に値する内容だった。

開発開始から一年半後の1981年6月、この製品はFDドライブ装置としてシカゴで開催されたNCCという国際的なコンピュータ関連の製品展示会において、発表・展示された。そこで、最も興味のある三大製品の一つに選ばれたのだ。ユニークなプロダクトとして取り上げられたのだ。

（略）

・夢と言われた技術を現実に

嘉本の言う「小さな組織」は、一人一人に当事者意識を植え付ける。最初はできないことが多くても、小さな組織では各人の成果が事業の成功を大きく左右するため、そのプレッシャーに応えるため各個人は成長スピードを加速せざるを得ない。

「だから、入社直後にうちのチームに入った新入社員三人は、日夜本当によく努力していましたよ。そして圧倒的に成長した。その成長スピードは、強制によっては達成できません。彼らは自ら進んで学び、自ら寝る間を惜しんで開発に専念していました」

上下関係はなく、全員が責任者となって一つの商品を完成させる。その各人のプロフェッショナル意識が、誰もが予想していない革新を生んだのである。

(略)

・HPに即決で採用されて、3.5 インチFDは世界に羽ばたいた

そして、この3.5 インチFDは驚くほどのスピードでビジネス化されることとなる。NCCでソニーの3.5 インチFDに目をつけたアメリカのヒューレットパッカード（HP）が、商品を製造する工場を見たいというのだ。

異例中の異例で、嘉本はHPを日本工場の生産ラインへ招き、結果、見学や質疑応答を経てHPの商品企画にソニーの3.5 インチFDが採用されることが決まったのである。

同時にソニーの規格が世界へ広がっていった。

(略)

その噂は、当時マッキントッシュの商品化を進めていたスティーブ・ジョブズの元にも届くこととなる。

(略)

・1983年3月12日、スティーブ・ジョブズ一行がソニーを訪問した

当時アップルは自社で5 インチFDの開発と製造を始めていて、その年の一月にそのドライブを搭載したパーソナル・コンピュータ、リサを発表した。しかし、その5 インチドライブの性能が悪くデータエラーが多発してリサの出荷ができないでいた。アップル自社製のフロッピーディスクドライブでは全く動作せず、発表・発売の目処が立たない状況であった。

「自社製の5 インチFDをあきらめ、ソニーの3.5 インチFDをマッキントッシュに使いたい」と何度となく提案した。ジョブズもついに合意して、その開発を依頼するためにソニーを訪問することにした。

(略)

・スティーブ・ジョブズが無言で退席

3月12日のミーティングには、ソニー側は副社長、常務、事業部長、部長、そして担当の嘉本が出席し、アップルからはジョブズ、マッキントッシュの開発総責任者のベルビル、購買責任者等が出席した。

最初ジョブズは今回の訪問の目的は3.5 インチFDをマッキントッシュ用に開発依頼をすることであると述べ、マッキントッシュがいかに画期的なコンピュータであることを説明した。

(略)

その後、質疑応答の中でジョブズが、記録容量を二倍に上げる磁気ヘッドの開発状況の説明を求めた。ソニーは新規磁気ヘッドのサンプルを見せ、準備ができていると説明した。ジョブズは

「この新規磁気ヘッドはソニー製ですか？」

と聞いた。ソニーの役員は

「もちろんです。」と答えた。

この時からジョブズの態度は一変し、全く何も言わなくなった。そして早々に会議を切り上げて、ソニーを去ってしまった。

(略)

当時、アップルはアップルⅡ用の5インチのF Dを自社開発して、アルプスに生産委託していた。アルプスはその生産を一手に引き受け、世界最大のF Dドライブのメーカーであった。ジョブズ一行は、ソニーに来る直前にアルプスを訪問し、アルプスの3.5インチの開発状況を聞いていた。ソニー製と説明した3.5インチ用の新規磁気ヘッドは、実は、アルプス製であった。ジョブズはソニーからホテルへ向かう車中で、「ソニーはF D事業に真剣でない、さらに嘘をつく会社であり信用できない。ソニーと今後は一切付合うな」と指示をした。

ジョブズは「3.5インチF Dは採用する。しかし、ソニーの3.5インチF Dは採用しない。アルプスと開発を進める」と決定し、部下全員に指示をした。一度下した決断は断固として曲げないジョブズである。

(略)

しかしアップルのマッキントッシュ開発の総責任者ベルビルは

「アルプスの3.5インチF Dはまだ開発途上であり、設計のノウハウを習得していない可能性があり、また生産の実績も全くない。一方ソニーは既にH Pが採用し、量産をしていて市場でも高い評価を得ている。ジョブズに内緒でアルプスと平行してソニーにも3.5インチF Dの開発依頼をすべき」

と判断し、ジョブズには内緒でソニーアメリカの役員に

「早急にアップルへ来て、3.5インチF Dをマッキントッシュ用に開発してくれるエンジニアを派遣してくれないか」と連絡した。

(略)

この時、こんなこともあったという。

「ジョージと仕事をしていたら、ジョブズが予定外に実験室に顔を出してしまって、ジョージに『嘉本さん、急いでロッカーの中に入ってください!』と言われ、しばらくロッカーに身を隠したのです。あの時は何が起きているのか、不思議に思いました。」

(その後アルプスから開発が間に合わないということが判明して、経営会議で議論があったとき、マッキントッシュ開発の総責任者のベルビルは「心配ない、ソニーと並行して開発を進めていて、目処はついている」と発言して一同ほっとした。という経緯があったとのこと。ベルビルもサムライですね。)

(略)

そして、5月1日に嘉本は5台の動作サンプル持って再度クパチーノを訪問した。そして、持ち込んだドライブをジョージ・クロウとマッキントッシュに繋ぎ、ほぼ完ぺきに動作することを確認した。

(略)

到着してから三日経ち、マッキントッシュにドライブを接続し恒温槽に入れ、高温下での長時間エラーレートテストを開始した。その日夕方、ジョージ・クロウと夕食をとり、夜の10時頃、評価の状況を確認するために実験室に戻った瞬間、嘉本は度肝を抜かれた。

その試作品の前に、ジョブズが立っていたのだ。

満面の笑みを浮かべ嘉本へ近づくジョブズは手を差し伸べ、嘉本へ握手を求めた。そして一言こう告げた。

「おめでとう。素晴らしいドライブをありがとう。」

嘉本が生み出した3.5インチFDがマッキントッシュに搭載されることが、正式に決定した運命的な瞬間である。そしてスティーブ・ジョブズは救われ、嘉本の「夢」はかなった。

(略)

・IBMがソニー規格を採用、ついにIBMを超えた

そしてソニー3.5インチFDは世界の業界標準となる。マッキントッシュの販売台数が月間二十万台を達成し、世の中に瞬く間に広まり、一九八七年にIBMがソニーの3.5インチFDを規格として採用したのである。

「我々ソニーは、IBMを超える記録ディスクを作る」

初期案の発表時に述べたこの言葉を信じた者はいなかった。しかし、誰もが不可能だと思った夢の技術は現実の製品となったのだ。

(略)

「実はジョブズがソニー製の3.5インチFDを採用すると決めてから、ジョブズに『アップルに移籍して、記録ディスクの開発をやってくれないか』とオファーされたのですが、断りました」

これ以上魅力的なオファーはないと思えたが、嘉本にはこんな思いがあった。

「私一人で3.5インチFDを開発した訳ではないのです。ソニーのメンバー全員が支えあって一つの商品が完成したのです。そんな中で自分一人がソニーを抜けてアップルに行くなんて考えられませんでした」

嘉本のソニーの仲間への愛が伝わる言葉である。

しかし、そんな嘉本も30年にわたって籍を置いたソニーを去ることを決断するのであった。

・好きなのに別れる、嘉本は決意した

(略)

読んでみませんか？ Amazon で発売中です。

◆俯瞰の書棚“日本4.0 国家戦略の新しいリアル”◆

今回は「日本4.0 国家戦略の新しいリアル」エドワード・ルトワック、奥山真司 文春新書です。

本書は徳川家康が開いた江戸幕府を「日本1.0」とし「明治システム」を「日本2.0」、1945年以降の「戦後システム」を「日本3.0」、そしてその次を「日本4.0」としてそのビジョンを議論しています。日本人ではできなかった視点で、現在日本の問題点とそれにどのように対処すべきかを独自

な視点で解説しています。「目から鱗」といった感じの本です。ご一読をぜひお勧めします。

著者の主張は

“日本はいま、また新しいシステムを作る必要に迫られているのではないだろうか。それは「同盟」を有効に使いつつ、目の前の危機にすばやく、実践的に対応しうる自前のシステムである。私はそれを江戸、明治、戦後に続く「日本 4.0」と名付けよう。私の考えでは、「日本 4.0」が戦わなければならないフィールドは、北朝鮮の脅威、米中対立を軸とした「地経学」（ジオエコノミックス）的紛争、そして少子社会である。”です。

私が漠然と考えてきた少子化対策優先を、ルトワックは、

“将来の納税者が減少すれば、近代国家は衰退するしかないのだ。子どもがいなければ、安全保障の論議など何の意味もないということだ。もし日本が本当に戦略的な施策を打ち出すのであれば、最も優先されるべきは、無償のチャイルドケアだろう。スウェーデン、フランス、イスラエルは、高い水準のチャイルドケアシステムを整備し、実際に子どもが増えている。

私は日本の右派の人々に問いたい。あなたが真の愛国者かどうかは、チャイルドケアを支持するかどうかでわかる。民族主義者は国旗を大事にするが、愛国者は国にとって最も大事なのが子どもたちであることを知っているのだ。”と一刀両断しました。

これこそ、安倍内閣が今後取り組むべき最終課題だと思います。憲法改正ではない。

北朝鮮問題についても極めて明確に論評しています。

“日本の問題は、1945 年以降、有効に機能してきた「戦後システム」が、北朝鮮というむき出しの脅威には対応できなかったということ”、そして直面する課題は、非核化です。

“北朝鮮のすべての核関連施設と、すべてのミサイルを排除するということ、すなわち軍事的非核化である。現時点では、北朝鮮が進む道は、大きく三つに分かれている。

非核化した北朝鮮がアメリカの戦略的な保護の下で経済的に発展する

最悪は中国による朝鮮半島支配

現状維持だ。それでも朝鮮半島が中国の支配下に入ることはマシなのだ。

即ち「北朝鮮問題」ではなく「朝鮮半島問題」ですが、これに関しては、

“ここで問題となるのは、韓国という国の戦略的な脆弱さである。つまり、韓国は北朝鮮問題に対する当事者意識や国防への責任意識をまるで持ち合わせておらず、ただビジネスだけに興味を示しているのだ”です。

核付きの北朝鮮との統一で、日本に優位に立てられるという文政権と韓国民の心理の底流と、日米間の認識との分断があり、これに対して米国はあからさまな苛立ちを示しています。

朝鮮半島を中国の支配下に絶対に置かせない。現状でも良い、それが米軍の北東アジアでのポジションなのです。

著者は軍歴もあるので、戦争についても鋭い洞察をしていて、

“現在の国際政治において、世界を脅かすような大国は存在せず、「ならず者国家」などによる小さな戦争や内乱が発生しているだけで、「偉大な国家目的のために戦われる戦争」は存在しなくなった。冷戦期を含むナポレオン以降の戦争は、国民全体を熱狂させる「国民戦争」、「総力戦」の傾向が強かった。そこでは戦争は英雄的（ヒロイック・ウォー）だったが、現在は「ポスト・ヒロイック・ウォー」の時代であると。そして

てそこでは、犠牲者を出すリスクが過剰なまでに回避される。これが「ポスト・ヒロイック・ウォー」である。現代の「ポスト・ヒロイック・ウォー」は、犠牲者を忌み嫌う時代の産物である。”

このルトワックの文脈で、現在アメリカが苦しんでいるアフガニスタンやイランでの戦争の長期化は、理解しやすくなります。ロシアは大国でありながら、ウクライナや周辺諸国に対して戦争を仕掛けているので「ならず者の国家」の側面もあるのですか。そして、“勝利という目的は得たいのに、リスクという代償は払いたくない。実際には莫大なコストがかかり、犠牲が増える可能性すらある。軽減されているのは、指導者たちの責任だけである。”と、現代の戦争を皮肉っています。

この本で得た新しい俯瞰の視座は「地経学」です。視点が変わると別の俯瞰図が見えてきます。

“冷戦後の世界は、軍事を中心とした地政学の世界から、経済をフィールドとする「地経学」の世界に軸を移しつつある。この「地経学」（ジオエコノミックス）という概念は、「地政学」（ジオポリティックス）という概念を発展させたもの。そこに経済の側面を加えたものが地経学である。つまり地経学とは、「貿易の文法」で展開される「紛争の論理」なのである。”

この主張は 30 年前の論文の解析であるとのことですが、この視点で見ると、現在の米中貿易戦争は絵に描いたようなこの図式です。トランプ政権はまさにこの戦略を推し進めているのでしょう。西太平洋と南シナ海の空間では地政学的な勢力争いをしながら、貿易戦争と言う経済面での戦争を推進しているわけです。まさに地経学的な米中戦争です。米中の対立の主戦場は、もはや軍事的な領域から、地経学的な領域、すなわち経済とテクノロジーをめぐる紛争に移りつつあるわけです。

日本と中国の関係も、尖閣列島で軍事的な対峙をしながら経済面で RCEP を共同で進め、アジアを中心とした世界の成長経済をそれぞれ最大限に取り込む構図です。ちなみに尖閣については、次のような助言をしています。

“私の考えでは、日本側が尖閣に武装した人員を常駐させることが望ましい。名目としては「環境保護」などでもよく、海洋保護調査員、サンゴ礁・漁業保護調査員でもかまわない。しかし、必ず武装させるべきだ。”

加えて、日本の安全保証については、

“先制攻撃能力を獲得し、それを即座に使えるようにしておくことは、日本政府の義務である。”と
いって、米国依存ではなく、自前の安全保障体制を持つ様に提言しています。

下記のくだりは、一般のメディアで全く触れられていないので真偽は定かではありませんが、興味深く、時にはトランプの話も真面目に聞く必要がありますね。

“トランプ大統領はトランスジェンダーの人々の米軍入隊を禁止せよというメモを発表した。これに対してマティスやペンタゴンの関係者たちは、ただちに反対を表明している。そもそもトランプ大統領がこのメモを発表した理由は、オバマ政権がトランスジェンダーの人々の受け入れを表明したからである。オバマ大統領の大統領令では、米軍はトランスジェンダーの人々を受け入れ、なおかつ同等に扱わなければならないとされていた。これは「同等の医療を受ける権利」も含まれる。このオバマ政権の政策によって何が起きたかという、性転換手術のための入隊だった。男性が「心は女です」といえば、胸をつけて男性器を落とし、女性が「心は男です」というのだったら、その逆の手術を行う。しかも、これは軍の医療機関で、国のカネを使って行われるのである。この性転換手術にかかる費用は異様に高いのだ。”

「第八章 地政学から地経学へ冷戦後の世界は、軍事を中心とした地政学の世界から、経済をフィールドとする地経学の世界に軸を移しつつある」

「第九章 米中が戦う地経学的」は、まさに現在の米中貿易戦争の「ネット裏の解説」です。すごく面白いですが、その内容は読んでのお楽しみにしましょう。
正月の読書におすすめします。

◆雑感・私感◆

以上も雑感・私感ですが、出来る限り参照データを紹介しています。個人のブログは面白いですが、個人的な偏りがありますから、できるだけメジャーなメディアを引用しています。以下は独り言として下さい。

エドワード・ルトワック（Edward N. Luttwak）は、1942年にルーマニアのトランシルヴァニア地方にある、アラドという街に住むユダヤ人の家庭に生まれました。島国育ちの日本人とは国際感覚が違います。生まれ落ちから国際市民です。厳しい環境で生き抜く力を磨いてきました。

安倍政権も長期化し、野党の積極的な支援のためまだまだ続きそうですが、安倍首相の最後の仕事は、少子化対策だと思います。本人は憲法改正としていますが、国を思う気持ちがあれば、少子化対策をやり遂げることが使命です。

“民族主義者は国旗を大事にするが、愛国者は国にとって最も大事なのが子どもたちであることを知っているのだ。”

経団連の最も重要な仕事はDX（デジタルトランスフォーメーション）の推進で、これで周回遅れの日本企業を世界水準に何とか持っていくことが、日本経済の生き残り戦略だと思います。そのためには大胆な規制緩和が必要ですし、またデジタル経済に対して新しい規制をすることも必要で

す。日本企業はあまりにも DX に遅れてしまいました。これでは、とても中国には対抗できません。

大学入試改革の民間英語テスト活用、共通一次記述式試験の中止ということで、ある意味おざなりな文部行政で不幸な結果を招くことは避けられました。わずかな作文で基礎能力がわかるわけがありませんし、公正で正確な採点ができるわけがありません。共通一次に加えて各大学が独自に入学基準を作るべきで、国立大学においても校風の差があってもいいと思います。

ゆとり教育と言う理想論、そして高校数学から行列式を外すことによって人工知能の基礎能力を失った日本、教育の専門家ではなく、そしていわゆる有識者でもなく、もっと広い国民的議論をもっと展開して行く必要があります。

IR で地域振興、本当ですか。これに絡む贈収賄事件で頭を冷やす必要があります。特に横浜市の林市長の言動は耳を疑います。

“参加者の男性が、林市長が IR の誘致表明をした 8 月の記者会見に触れ、「その時点で市民には反対が多かった。（市長は）それと逆の判断をした」と指摘。これに対して林市長が「市民の多くの方が反対だという認識はありませんでした。大変失礼なことかもしれませんけども」と応じた。直後、会場が騒然とし、「それはないだろ!」「ええーっ!」といった声が飛び交った。どよめきはしばらく収まらなかった。”

◆内容・記事に関するご意見・お問い合わせ/配信解除・メールアドレス変更は、
webmaster@fukan.jp まで、ご遠慮なくお寄せください。

◆俯瞰 MAIL96 号（2019 年 12 月 28 日）

発行元：一般社団法人俯瞰工学研究所

発行人：松島克守

編集長：松島克守

配信人：石川公子

URL：<http://fukan.jp>
